

保育実践研究の報告

長谷川 武 弘（お茶の水女子大学人間発達教育研究センター）

1. 本取り組みの概要

本報告は、チャイルド ケア アンド エデュケーション講座で開設している授業「保育実践研究」において、受講生が取り組んだ研究活動の報告である。本講座は現職保育関係者を対象に授業を開講している。その多くは講義形式で開講されるため、受講生が自ら課題に取り組む機会は少ない。そこで、現場などでの疑問・関心について自ら課題を設定し研究として掘り下げ、2年間かけてまとめていく作業を3名の講座教員(榊原・大戸・長谷川)が支援する授業として保育実践研究を開講している。受講生には他の授業のように受け身で講義を聞く姿勢ではなく、積極的に自身のテーマを掘り下げていく姿勢が求められるという特徴を有する授業である。本年度(平成20年度)は9名がそれぞれに研究テーマを決め、調査・実践を進めてきた。

2. 受講生の研究報告（一部途中経過報告）

「世田谷区立保育園における質の向上のためのアクションプログラムの実践」 安永もと子

＜保育所における質の向上のためのアクションプログラムについて＞保育所指針の改定(平成20年3月28日公布)により、保育の内容の質を高める観点から、新保育所保育指針を踏まえ、地方自治体では、今後取り組んでいくことが必要な施策を一体的・計画的に推進するプログラムの策定をすることとなった。世田谷区では、区内地域の実情を考慮して、以下の事項について5年間のアクションプログラムを策定している。(1)保育実践の改善、(2)安全・安心な保育、(3)職員の資質向上、(4)保育を支える基盤の強化。

＜世田谷区立保育園における質の向上のためのアクションプログラムの実践＞基本方針を、質の向上の基本をなすものは人材であり、保育を担う人材の育成は欠かせないとしている。さらに、保育の基盤となる環境を調査し、見直すことによっても、保育の質を向上させるとしたことである。今年度は、保育内容の理解と実践を目的に、現状の保育の環境面から保育の質の向上を目指す取り組みとして、研修、企画書作成、施設見学、保育環境の調査を実施した。

＜今後の課題＞保育環境の調査結果をもとに、既存の保育空間をより機能的に活用するためのあり方をさぐり、保育空間の改善の指標を具体化し、さらに活用することをめざす。また

保育施設の、改善の前後における保育士の活動への影響を調査し、保育の質の向上の継続化を図る。

「絵本はどのように読まれているか」 今村 桂子

子どもの好きな遊びの中に、ごっこ遊びがある。絵本やTVのヒーローのお話をもとにして、自分の好きな役になりきり、ドラマティックに遊びを展開していくのが、ごっこ遊びである。そのように遊びを盛り上げ、夢中にさせるお話や絵本は、子どもとどう繋がっているか検討し、読まれている状況や、その後の作用から、絵本の及ぼす影響について調べた。

絵本を活用している様子が記述された12件の文献資料を対象として、「絵本の内容」「読まれた場所」「読んだ人」「聞いた人の年齢」「どのように聞いたか」「その後どのような作用を及ぼしたか」に着目して、絵本の読まれ方を分類した。絵本は内容別に6項目に分類し、その作用は渋谷（1988）をもとに「好奇心・探索」「夢・あこがれ」「葛藤」「信頼」「言葉の獲得」「美の体験」「その他」の7項目に分類・分析した。

「長時間保育の低年齢児（1～3歳未満児）にとって、どのような園生活の過ごし方が望ましいのか？」 市川 里美

次世代育成支援の一環として多様な保育サービスと低年齢児の待機児解消のため、拡充が急がれ、各自治体では様々な保育事業の展開がなされている。そして、低年齢児の長時間保育は、拡大されているが、長時間保育における望ましい環境や保育内容は、なかなか問題にされていないのが現状である。このような現状で、低年齢の子どもの長い園生活時間をどのように組み立て、そこから考えられる環境・配慮・援助を工夫する必要がある。

本研究では、方法として在宅家庭と保育園利用家庭とに子どもの生活リズム（食べる・水分補給・遊ぶ・外遊び・親子の関わる時間・テレビ視聴時間・子どもの行動の動と静・ぐずる・泣く）のアンケートを取り、時間帯や回数を比較する。この比較から、どのくらいの自由度が在宅家庭児にあるのかという実態をふまえ、集団生活において、子どもが長時間でも心身共に安定した園生活が過ごせるような取り組みを検討し実践する。4～5月に調査・結果を出し、考察していく計画である。

「発達障害児の自尊感情を育てる療育とは何か～乳幼児期の地域における療育モデルを考える～」 奥田 葉子

発達障害を持つ成人期の人で、社会生活がうまくいっているとされる人びとは、高機能もしくは、自分の苦手さの自己認知がある人、またそれをわかってくれる人が身近にいると言われる。小学校中学年から中学にかけて形成される自己認知が、自尊感情を育てる基礎に

なるとすれば、それ以前の乳幼児期から小学校入学あたりの育ちで重要なこととは何であろうか。本人および周りの人と、家庭と機関の関係性も含めて、子育て支援の視点から、乳幼児期の「療育」を考えてみたい。発達障害の子ども達の保護者は、乳幼児期から育てにくさを感じており、保護者の育児に対する負担感やストレスは想像以上である。その中で、保護者や保育者はどのようにかかわればいいのか。早期発見・早期療育の現場として「自尊感情を育てる療育」を考えたい。

「延長・夜間保育に関する調査～子ども達の成育環境に対する子育て支援事業の現状を捉える～」 須貝 美香・中村 たみ

＜目的＞延長・夜間の長時間保育が、子ども達の生育環境の変化に伴う、情緒的発達に影響があるかを保育者の保育実践的意見に基づいて知ること。また、保育の人的・物的環境が、子ども達の状況にあった条件になっているかを検証する。

＜対象・方法＞東京都内の社会福祉法人私立保育園 8 園、159 名の保育士対象で行っていく。(回収率 39%) 調査期間は、2008 年 12 月 8 日～15 日の約 1 週間とし、選択式と一部自由記述式で実施する。

＜結果＞各園の空間スペースの違いと保育士の主観的見解はあるが、生活空間の確保と子ども達の落ち着き度には相関が見られ、年齢や個別的配慮の工夫をしていた。しかし、生活習慣の乱れを懸念する回答が多く見られ、長時間保育が生活習慣を整えるのではないかという子ども達の成育環境への疑問や課題が表明されていた。また、自由記述の中で保育士は育児環境を脅かしている原因を様々な視点、問題意識をもって今後の保育の在り方を考えていた。

「保育園年長児の午睡中止による生活リズムの変化と就学後の効果」 山岸 こずえ

＜目的＞私の勤務する保育園では年長児が就学後に規則正しい生活リズムにスムーズに移行出来る様に就学 1 か月前の 3 月に午睡を中止した。午睡中止の有効性について保育の意義を検証するため子どもの生活リズム推移について保護者への聞き取り及びアンケート調査を実施した。

＜内容＞年長児 22 名の 2・3・4 月の生活リズム（就寝・起床・睡眠時間）のデータを基に午睡中止の効果の有無を検証した。就学後の目標時間の達成数の分析では達成数が少なかった。また個人生活リズム表の作成およびグループ化（早寝早起・遅寝遅起・それ以外の 3 つ）により午睡中止期間中の子どもの生活リズムの変化の分析を行った。午睡中止により生活リズムが安定し就学後に効果があったと思われる一方でリズムの乱れが見られるケースが

あった。保育士は「睡眠リズムは1人ひとり異なるものである」ことを把握した上で集団保育としていかに柔軟に対応していくかが問われている。

「子どもショートステイ担当者の意識調査」 元良 美佐子

＜目的＞発達障害児等の養護について、事業担当者の意識を把握し、事業が地域の福祉サービスとして活用されるための課題を探る。

＜方法＞東京都の児童福祉施設の担当者32人を対象に、平成20年7月から8月迄、郵送の質問紙法による意識調査を実施し、担当者の雇用形態や経験年数等と発達障害児の特徴や事業に対する意識との関係を調べた。

＜結果＞回収率は50%で、経験の少ない者は手の掛かり具合を、経験の多い者は児の発達の具合を預かり感の基準にし、事故や健康の危惧に関わる言動に預かり難さを感じていた。各特徴は互いに影響し合い預かり難さを強めることが分かった。地域の協力には意識が低かったが、養育環境や軽度障害児及び研修に関心が高く、事業にやりがいを感じていた。

＜考察＞発達障害児等の養護には、家庭の養育方針に沿った冷静な対応が求められる。事業環境の整備、担当者の子の発達と家庭環境への理解、地域への事業の周知が課題となろう。

「発達障害」に関する保護者の意識調査について」 嵐田 貞子

＜目的＞本研究では、保育園と幼稚園における発達障害児の支援体制を作る第一歩として、保護者の「発達障害」に関する意識調査を行った。

＜方法＞対象は首都圏・関東近県の私立保育園・幼稚園9園に在園する年少・年中・年長(3～5歳)の保護者。選択式質問紙法(一部自由記述式)、無記名回答で実施した。

＜結果＞①幼保共に3割強の保護者が「気になる子がいる」と回答。「気になる内容」は幼保共に「乱暴」が一番多かった。②発達障害認知度において、「よく」と「少し」を合わせ8割の保護者が「知っている」と回答。③発達障害名称に関して幼保の保護者共に「自閉症」「ADHD」「LD」の認知度が高値を示し、「高機能自閉症」「PDD」は低値となった。

＜考察＞保護者の発達障害名称認知度は、先行研究にある保育者の認知度と似ていた。自由記述より「保育者・教師に学んでほしい」「自分達も学びたい」等の意見が2割強あった